シェイクスピア劇主要人物役柄研究

第二部　マルボーリオ

Notes on Some Important Roles in Shakespeare's Plays

Part II　Malvolio

荒　井　良　雄
(YOSHIO ARAI)

(一)

シェイクスピアの喜劇「十二夜」は，オーシーノー，オリビア，バイオラにセバスチャンが加わった"Love"を主題とする人違いのロマンティックな主筋と，マルボーリオをにせのラブ・レターでからかう愉快な副筋に，歌や踊りもとり入れてあって，明るい笑いに満ちあふれた楽しい作品である。そして多くの批評家は，この作品に最高の讃辞をおくってきた。

(1) This is justly considered as one of the most delightful of Shakespeare's comedies. It is full of sweetness and pleasantry.

(*William Hazlitt*)

(2) *Twelfth Night*, the perfection of English comedy, and the most fascinating drama in the language, could not have failed in success as an acting play. (*Halliwell*)

(3) This is the happiest and one of the loveliest of all Shakespearian plays. It is the best English comedy. (*J. Masefield*)

(4) Last and best [of the comedies] came *Twelfth Night*...

...this most exquisite of all Shakespeare's comedies. (*J. Dover Wilson*)

(5) Is there anywhere a more delightful comedy than *Twelfth Night*? (*Leslie Hotson*)

たしかに「十二夜」は，見る観客にとっても，演じる俳優にとっても，実に楽しい芝居であって，Toby Lelyveld によれば，「十二夜」は今世紀に入ってからロンドンで上演されたシェイクスピア劇中，「ハムレット」「ベニスの商人」に次いで上演回数の最も多い作品になっている。

この楽しい喜劇「十二夜」の中で，一番興味深いのは，副筋の主要人物マルボーリオであろう。「ベニスの商人」の副筋の主要人物であるシャイロックが，観客に強烈な印象を与えるように，「十二夜」のマルボーリオも，この劇を舞台で見た人たちには忘れられない特異な人物となっている。

このマルボーリオに，Leslie Hotson がその著書 *The First Night of Twelfth Night* (1954) の中でいうように，「十二夜」が 1601 年 1 月 6 日に Whitehall 宮殿の大広間で初演された時，当時の観客の反応を計算に入れた topical satire があてこまれていたとすれば，初演当時の観客席は大いにわきかえり，現在の私たち以上に，マルボーリオの奇異な行動をあざけり笑って，この芝居を一層楽しんだものと推定される。

ホトスンがマルボーリオのモデルとしてあげているのは，Sir William Knollys という人物である。Knollys (pronounced and often written, Knowles) は，その頃，王室の監督官 (Comptroller of her Majesty's Household) を務めていた人物であり，この監督官という職は，王室の会計監査役と召使達の監督を主な仕事としており，職権のシンボルとして，また実際にこん棒として使うために，白くて細い杖を持っていたという。ノウリスは頑固でおせっかいやきの役人で，この杖を振りまわしながら宮廷の召使を監督していたので，当時の宮廷人は，この人物が舞台の上であざけられるのを見て痛快に思ったであろうと，ホストンは推定するわけである。

その上，ノウリスは当時宮廷で評判になったスキャンダルと関係のあったことも，舞台であざけられる大きな原因となっている。「十二夜」初演の約五年前，つまり 1595 年に，Mary Fitton という美しい娘が，17 才で女官として宮廷につかえることになり，彼女の父 Sir Edward Fitton は，ノウリスに娘メアリィの監督を委託した。その頃のノウリスは 48 才で，年上の未亡人と結婚していたのだが，そのうちに父親と娘ほど年令のひらきがあるメアリィを愛するようになり，妻が死んだらメアリィと結婚しようと考え，熱烈なラブ・レターを書いていたという。ところがメアリィの方はノウリスを適当にあしらい，2 才年下の若い貴族で，のちに Earl of Pembroke となった William Lord Herbertを愛するようになり，1600年にはエリザベス女王の厚い信頼を裏切ってペンブルック伯の子供を生んだ。しかしペンブルック伯がメアリィとの結婚を拒絶したので，2 人の情事のスキャンダルは宮廷内に広まり，「十二夜」が初演された 1601 年 1 月に，メアリィはついに監禁の身になったという。だから一幕三場のトービーのセリフに，

> Wherefore are these things hid? Wherefore have these gifts a curtain before 'em? are they like to take dust, **like Mistress Mall's picture**?

とあるのは，人眼をさけているメアリィ (Mal 又は Mall は Mary の愛称で，今では Moll ともつづる) にあてつけたものだと，ホトスンは推定するわけである。

メアリィとペンブルック伯との情事が，当時の有名な事件であっただけに，この劇が初演された当時 53 才になっていた監督官のノウリスが，白くなったひげを染めて，(うまく染めきれないので，ひげのつけ根は白，まん中は黄色，先端は黒という具合に「まだらひげ」になっていたという) メアリィに対する老らくの恋に熱中する姿は，嘲笑の対象としては絶好の材料になったものと考えられる。

シェイクスピアは，おそらくこうした特異な実在人物のノウリスをモデルにしてマルボーリオを創造したのであろうと推定することは可能であり，Malvolio という名前も，ふつうは Mala-voglia (=Ill Will「悪意」又は Evil Concupiscence「悪欲」) からきたものと解釈されるが，この場合にはホトソンのいうように 'Mal'-voglio (='I want Mall', 'I wish for Mall', 'I will have Mall') と解釈すれば，Mall は Mary の愛称であることを考え合わせて，これは「メアリィをものにしたい」というノウリスの老らくの恋をあざ笑った名前となり，舞台でこの名前が登場人物の口にのぼるたびに，観客は喜こんだものと想像されるのである。ちなみに「十二夜」の中で，マルボーリオという名前は 31 回もくりかえして登場人物たちの口にのぼっている。シェイクスピア劇中で一番長い「ハムレット」の中で，主人公ハムレットの名前がくりかえされるのは 67 回と圧倒的に多く，これは例外だとしても，30 回以上もくりかえされるマルボーリオという名前は観客の耳に残ることはたしかで，しかもその中の 2 回は，観客の笑いが最高潮に達する 2 幕 5 場のマルボーリオを中心にした "the Letter Scene" と，黄色いストッキングに十文字の靴下止めをして，にやにやしながら彼が登場する 3 幕 4 場で，マルボーリオ自身が名乗るのだから，この topical satire は実に生き生きとしており，シェイクスピアの意図した喜劇的効果は十分にあがっているように思われる。

シェイクスピアは「ベニスの商人」を書いたとき，エリザベス朝の観客一般のユダヤ人排斥の感情と，高利貸に対する嫌悪感を計算に入れつつ，トピカルなロペス事件の異常な反響を利用して，悪役のシャイロックを創造したように，「十二夜」においても，当時宮廷人の間で話題の中心になっていた監督官ノウリスに対する観客の感情を計算に入れつつ，マルボーリオという特異な人物を創造したらしい。そしてマルーボリオのモデルが，ホトソンのいうようにノウリスであったとするならば，初演の時にマルボーリオを演じた俳優は，当然まだらひげをつけ，白い杖を持ち，ノウリスの特徴をまねた動作で舞台に現われ

たであろう。そして現在の私たちには直接関係のない愉快な topical satire のために，観客は大いに笑ったものと想像されるわけである。

しかしシェイクスピアの人物描写と情況設定が非常に巧みで適確であるだけに，マルボーリオはある時代の観客だけに受ける，単なる topical allusion の面白さを離れ，彼の奇異な行動はいつの時代の観客の眼にも面白おかしくうつり，シェイクスピアの創造した代表的喜劇人物として長い舞台生命を持ち続けているように思われる。

そして 1622 年 2 月 2 日に「十二夜」がホワイトホール宮殿で上演された時に，「マルボーリオ」という題名で記憶されて以来，マルボーリオの役は座頭級の俳優によって演じられるという伝統ができている。Macklin (1741 年), John Philip Kemble (1789 年), Samuel Phelps (1848 年), Henry Irving (1884 年), Beerbohm Tree (1901 年), Laurence Olivier (1955 年), Eric Porter (1960 年) などがこの役に取り組んだところをみると，マルボーリオは「ベニスの商人」のシャイロックと同様に，名優の上演意欲をそそる役柄であるらしい。

(二)

「十二夜」の中で，マルボーリオが登場するのは，全体が 18 場あるうちの 7 場にすぎないが，シャイロックの場合と同様に，副筋の主要人物であることに変りはない。登場場面数やセリフ数の上では小フォルスタッフとも呼ばれるトービーにゆずり，狂言まわしの役はマライアがつとめ，道化役にはフェステがひかえているが，マルボーリオは観客の注目する特異な人物として，劇中にその性格が十分書きこまれて躍動している。

マルボーリオがはじめて舞台に登場するのは，1 幕 5 場である。女伯爵オリビアの執事 (steward) で，年令はモデルとなったノウリスの年令のことも考えに入れて 50 才前後，衣裳は *Shakespearian Costume* (1889) に，次のように出ている。

	登場場面（セリフ数・行数）	場面数	セリフ数	行数
Toby	I–3 (27・61), I–5 (4・9), II–3 (29・56), II–5 (26・39), III–1 (4・5), III–2 (11・32), III–4 (36・124), IV–1 (5・10), IV–2 (6・12), V–1 (3・7).	10	151	375
Viola	I–2 (11・34), I–4 (7・13), I–5 (21・72), II–2 (3・28), II–4(12・32), III–1 (32・67), III–4 (18・50), V–I (17・47).	8	121	343
Andrew	I–3 (23・50), II–3 (26・49), II–5 (11・12), III–1 (4・6), III–2 (7・11), III–4 (9・15), IV–1 (2・6), V–I (6・18).	8	86	167
Maria	I–3 (16・31), I–5 (12・24), II–3 (11・34), II–5 (3・17), III–2 (2・15), III–4 (13・27), IV–2 (2・5), V–1 (0).	8	59	153
Feste	I–5 (22・59), II–3 (14・31), II–4 (5・26), III–1 (13–38), IV–1 (5・17), IV–2 (26・71), V–1 (19・70).	7	104	312
Malvolio	I–5 (10・33), II–2 (3–13), II–3 (5・19), II–5 (23・107), III–4 (21・55), IV–2 (22–42), V–1 (3–18).	7	87	287
Olivia	I–5 (50・121), III–1 (13・54), III–4 (20・45), IV–1 (4・17), IV–3 (2・12), V–1 (30・67).	6	119	316
Orsino	I–1 (4・31), I–4 (5・27), II–4 (20・70), V–1 (30・92).	4	59	220

（本論中の行数指定及びこの表の行数はケンブリッジ・ポケット・シェイクスピア版による）

Malvolio——Doublet of light brown silk, quilted or latticed with gold braid. Pink silk sleeves, puffed at the shoulder, and slashed with brown. Trunks slashed to match. Brown silk tights, cross-gartered. Lace ruffle and cuffs. Low shoes.

この指定では，茶色が基調になっている。喪に服しているオリビアの衣裳が黒なので，茶色を選んだものと思われるが，黒を基調にする場合もある。杖はノウリスをモデルに考えると白くて細いものを使い，首からは金の鎖をかけ，指輪をはめる。そして登場した瞬間から，いかにもいばりかえっている厳格な執事の印象を与えるように行動する。トリーは堂々と入場し，アービングは先

の曲った鼻をつけ，なにか考えごとでもあるかのように両眼を半ば閉じて，自分以外のすべての人たちを嫌悪し軽べつしているような様子で登場したという。Geoffrey Kendal のマルボーリオ (1964年7月22日，於国際芸術家センター) は，歩きつきはもとより，杖の使い方でもって，いばりかえっている感じをよく出していた。カーテンを開くのにも，手を使わないで杖で開けたりしていたのは，マルボーリオの横柄な態度にぴったりした演技工夫であったと思う。

マルボーリオの舞台上の第一声 (I. 5. ll. 73–75 及び ll. 81–87) はフェステを馬鹿にして非難するセリフだが，これは他人の欠点ばかりが目について，人に寛大な態度がとれない，いかにも独善的な，うぬぼれの強い人物のセリフである。これに対してオリビアはすぐに，

> *Olivia.* O, **you are sick of self-love,** Malvolio, and taste with a distempered appetite. To be generous, guiltless, and of free disposition, is to take those things for bird-bolts that you deem cannon-bullets. (I. 5. ll. 88–92)

といって，マルボーリオの欠点を指摘し，注意を与えているが，実はこの "self-love" こそは，マルボーリオの性格の中心となる言葉であり，この喜劇の中であざけりの対象になっているのも，この "self-love" なのである。

次にマルボーリオが登場するのは2幕2場であり，オリビアから指輪をあずかって，それをバイオラに渡すために，男装のバイオラのあとを追ってくる。オリビアは1幕5場の終りで，バイオラに指輪を投げつけられたとはいわなかったし，投げつけて返せともマルボーリオに命じていないから，指輪を地面に投げて置去りにしてくるのは，マルボーリオの横柄でひとりよがりな態度がよく出ているセリフと思う。彼は指輪をさし出して "Receive it so." (II. 1. l. 11) というが，相手が受取ろうとしないので，"...it should be so returned." (II. 1. l. 14) のセリフのあとで「バイオラの足もとへ投げる」(The New Shakespeare のト書) のである。この動作に stage business の tradition がある。マルボー

リオは細い杖の先から指輪を通して，それを地面へ落とすという所作である。これは実に無作法でつむじ曲りな所作で，いかにもマルボーリオらしく，その上，指輪を舞台の上へ投げつけてはどこへころがっていくか見当がつかないという不便さがあるので，この工夫はよく利用されている。The Tokyo Amateur Dramatic Club の公演 (1957年4月，於一ツ橋講堂) における Brian Moore のマルボーリオ及び Geoffrey Kendal のマルボーリオは，いずれもこの stage business を使っていた。Kendal の説明によると，この所作は Sir Herbert Beerbohm Tree のマルボーリオ (1901年2月) あたりから始まった工夫ではないかということだ。Arthur Colby Sprague の労作 *Shakespeare and the Actors* の中でも，この stage business は Tree がはじめて使ったらしいとは述べているが，断定はしていない。

2幕3場は，サー・トービーやサー・アンドルーが夜中に酒に酔って大騒ぎをしているところへ，マルボーリオがとびこんで来て酔どれ連中をしかりつける場面である。マルボーリオのモデルとなった監督官のノウリスが，深夜まで騒いでいる宮廷の召使たちを取締るために寝巻姿のままで姿を現わしたという伝説によって，この場面のマルボーリオは白い寝巻姿で，手に燭台を持って登場するようになった。Clement Scott は，Henry Irving のマルボーリオ (1884年7月) が，dressing gown のままの姿で night-cap をかぶって登場したとき，観客は大いに笑ったと記録している。またマルボーリオが毛脛まる出しで飛び込んでくるという演出もある。John Moore の Promptbook には，マルボーリオが「脅迫するように頭と手をふりながら退場する」とある。

2幕5場は，ふつう "the Letter Scene" と呼ばれる。マライアがオリビアの筆蹟とそっくりのラブ・レターを書いて庭に落しておくと，それにマルボーリオがひっかかって夢中になるという，この喜劇の中でも最も面白い場面である。しかしこの場の面白さを十分に発揮させるには，演出上にさまざまな問題点があって，最もむづかしい場面ともなっている。それは主として，この場面

のほとんどがマルボーリオの独白 (soliloquy) と，トービー，アンドルー，フェビアンといった立聞き者たち (eavesdroppers) の傍白 (aside) からなっているという，シェイクスピア劇中でも最も特殊なシーンであるためだ。

シェイクスピア劇の「立聞きの場面」(overhearing scene) では，その場面の中心人物は観客に最も近い位置で演技すべきだというのが，John Gielgud の提唱する「立聞きの場面」演出上の原則的な理論である。「ハムレット」の3幕1場では，ハムレットとオフィリアは舞台前方の観客に近い位置で演技し，立聞き者であるクローディアスとポローニアスは，うしろにかくれる。その他「オセロー」においても，「むだ騒ぎ」においても，シェイクスピア劇のたいていの「立聞きの場面」に，この理論は適用できる。したがって「十二夜」の Letter Scene をこの理論で演出すると，舞台の中央に低い茂みを置き，その背後に立聞き者たちがかくれていて，aside を話すときだけ顔を出すという演出になり，これが伝統的なこの場面の演出法になってきた。Moore の Prompt-book にも，マルボーリオが近づいたとき，アンドルーは手紙を拾いに行こうとして，トービーに中央の茂みへ引っぱりこまれるとあるから，舞台中央に茂みを飾って，そのうしろに立聞き者たちがかくれているわけである。

ところが，ギールグッドによると，この場面だけは原則を破って，マルボーリオを観客から離れたところに配置し，立聞き者たちを前にもってきて彼らの aside を生かし，平土間の観客にかけた方が効果的で，真の面白さが出るという。たしかにマルボーリオをやじる人の aside は，どれもが性格と情況にぴったり合っていて，近くの観客にかけてこそその面白さが生きてくるので，上演の効果をあげるには是非前でやらせたいところだろう。

しかしマルボーリオが手紙を拾って，それを読みながら長い独白を続ける個所 (ll. 143–182) を，全部舞台のうしろで演出しては，せっかくの 39 行にわたる散文の長ゼリフが生きてこない。しかもこの間には，一言も立聞き者の aside が入らないという，まったくのマルボーリオの一人舞台なのである。そ

こで，これはやはり原則通りに，この場面の主役であるマルボーリオを舞台の前へ是非出して演技をさせたいところであろう。こうして aside を生かすか，soliloquy を生かすか，ということがこの場面の演出の主眼点になってくるのである。そこで，この二つを両方とも生かす演出は考えられないだろうか。ギールグッドが見たという Jean Anouilh の散文訳によるパリ公演の「十二夜」は，この場面の処理が見事におこなわれている "an admirable production" で，彼はその演出法に接したとき，わが意を得たようにうれしかったという。その演出によると，立聞き者たちは最初のうちはいくつかの植木鉢に植えてある花の咲いた小さな灌木の背後にかくれて舞台の前方にいるが，マルボーリオの動きに合わせて灌木を動かしながら舞台をぐるぐるまわるのである。こうしてマルボーリオは soliloquy の大部分を舞台前で話し，それから他の位置へ移動していく。一方立聞き者たちは，彼と入れ替えに前方へ出て来て，彼らの aside を観客に話しかけるという工夫である。この演出ではマルボーリオが時どき肩ごしに灌木を見て，いつもと違った位置に移動しているのを不思議そうにするといった所作を入れたという。ギールグッドはこの演出法を "a most amusing device" だとほめているが，この演出法をとると，マルボーリオの39行にわたる長ゼリフも，たっぷり舞台前で聞かせることができ，その間，立聞き者たちはうしろの灌木から顔を出したり，飛び出して来たりして，性格に合ったパントマイムでそれぞれの反応を出すことができ，しかもこの無言の喜劇的な動作が，マルボーリオの長ゼリフを殺すのではなく，かえって生かすことにもなると思うのである。

この演出法で大切なのは，立聞き者がマルボーリオの動きに合わせて舞台をまわるという点である。前にも述べた通り，この場面はそのほとんど大部分が soliloquy と aside からなりたっているという，シェイクスピア劇中でも非常にまれな場面であり，この両方を生かす演出法が舞台をまわることにあるとするならば，この戯曲の構成とスタイルがそうした演出法を要求しているのでは

ないだろうか。そしてこの劇を書いたシェイクスピアも，あくまで座付作者で自分自身が演出にもタッチしたとするならば，aside と soliloquy を十分に生かす舞台を頭において，この場面のセリフを書いていたと考えられる。

そこで再考してみなければならないのは，ホトソンが *The First Night of Twelfth Night* の中で主張している「十二夜」は円形劇場形式 (an arena-stage, a theatre-in-the-round) で初演されたという説である。ホトソンはこの本の中で，「十二夜」がホワイトホール宮殿の大広間で，エリザベス女王を前にして上演されている立体想像図と，ホワイトホール宮殿の平面図までかかげて，くわしく円形劇場形式の演出を説明し，想像で当時の上演の様子を再現してみせる。そしてシェイクスピアの属する劇団のパトロンであった Lord Chamberlain Hunsdon が，十二夜にホワイトホールで行われた喜劇を記録した忘備録に，

> In the Hall, which was richly hanged and degrees [=tiers of seats, grandstands] placed **rownd about** it, was the play after supper.

とある文章を手がかりし，グローブ座に代表されるこれまでのエリザベス朝劇場の張出し舞台 (the projecting stage) の既成のイメージを取り去って上の文章を読むと，'rownd about' はあいまいな表現だが，舞台の三面をかこんでという意味ではなく，文字通りの 'round about', つまり「舞台の四方をかんで」(completely round, on every side) という意味だと解釈し，「十二夜」の初演が，観客が舞台の四方をとり囲む円形劇場形式で演出されたのみならず，他の多くのシェイクスピア劇も，木造の O 型劇場 ('Within this wooden O' *Henry V*, Prologue l. 13) で上演されたと推定することも可能であるとする革新的な意見を提出したのである。そして舞台の位置に関しても，ホトソンは当時のホワイトホール宮殿の資料の中に，'...framing & setting up **a broad stage in the middle of the haull.**' という文章を見つけた出して，自説を証拠立て，さらに 1960 年には *Shakespeare's Wooden O* という研究書を出版して，このユニークなアイデアを発展させた。

シェイクスピア劇が円形劇場で上演されると，観客は劇場の真中で躍動する演技者の演技をすぐそばで見ることになり，観客の視点は一点に集中し，俳優と観客の交流がどの上演形式よりも密になるといえよう。こうした上演形式があってこそ，aside や soliloquy が本当に生きた効果をもつといえるのではなかろうか。もしホトソンの提唱するような革新的な円形劇場形式の演出で「十二夜」が初演されたとすれば，そしてシェイクスピアも円形劇場形式の上演を頭においてこの芝居を書いたとすれば，円形劇場形式に近い演出法を採用することによって，'the Letter Scene' の aside や soliloquy を作者が意図した通りの面白さで生かすことが可能になるわけである。ただ舞台の中央に茂みを配置するだけで，すべては円形舞台が解決してくれる。マルボーリオは舞台を soliloquy をしゃべりながら動きまわればよい。立聞き者たちもマルボーリオの動きに合わせて茂みのまわりをかくれてまわりながら，aside を四方の観客にかければよいである。ギールグッドが見たというパリ上演の「十二夜」の 'the Letter Scene' の演出は，実はこの円形劇場形式の演出を，うまく額縁舞台で応用した演出だともいえるが，これが soliloquy と aside の面白さを真に生かした一番成功した 'the Letter Scene' の演出だとすると，この場面を書いたシェイクスピアの頭の中には，ホワイトホール宮殿における円形舞台の演出があったのかもしれない。そうだとすると，ホソンの新説は，'the Letter Scene' に関するかぎりは，実に好都合な学説となるわけである。

3幕4場は，マルボーリオがにせのラブ・レターの注文通り，黄色い長靴下に十文字の靴下止めをして，にやにや笑いながらオリビアの前へ現われる実に滑稽な場面である。黄色はオリビアの大嫌いな色だが，エリザベス女王にとっても大嫌な色だったといわれている。それは黄色が臆病者の色とされていたからであり，当時イギリスの大敵であったスペインの国旗も，黄色だったからである。またギリシヤ神話の Narcissus が自己陶酔のために黄水仙にかえられたことにちなんで，黄色はうぬぼれの強いマルボーリオの色であるともいえる。そ

の上，十文字の靴下止めは，1600年頃にはすでに流行遅れになっていて，当時は主として老人，ピューリタン，馬丁，田舎の花婿によって使用されていたというし，長靴下も同様に時代遅れだった。したがってマルボーリオの扮装は現代の私たち以上に，当時の人には滑稽な姿に見えたものと想像されるのである。

マルボーリオは，この場面に登場するとすぐに，

> I could be sad: **this does make some obstruction** in the blood, this cross-gartering. (III. 4. ll. 20–21)

といっているから，十文字の靴下止めのおかげで血液の循環が悪くなり，しびれをきらしたように妙な足どりで出てくることになる。俳優座が「十二夜」を上演したとき (昭和34年9月)，浜田寅彦のマルボーリオは，召使に呼ばれてオリビアが退場したあと舞台に一人になると，長い soliloquy (ll. 68–87) の間に腰をおろして，十文字の靴下止めをほどき，血液の循環をよくするという所作を入れた。そのあとでマライアがトービーとフェビアンをつれてもどってくるので，マルボーリオはいそいで靴下止めを足に巻きつけるが，あわてているので両足を靴下止めでしばって動きがとれなくなり，以下の場面でトービーやフェビアンにさんざんおもちゃにされるという段取りであった。この stage business は，今までに調べたかぎりの研究書には紹介されていないので，浜田氏自身の工夫か，演出の小沢栄太郎氏がイギリスで見てきた「十二夜」からヒントをえたのか，いずれともはっきりしないが，面白い工夫であると思った。

4幕2場は，"the Dark Room Scene" とも呼ばれ，狂人扱いにされたマルボーリオが室内に閉じ込められ，フェステに翻弄される場面である。マルボーリオはふつう舞台奥の内舞台 (an inner stage) のカーテンの背後に入れられる演出がとられるが，地下室 (trap を使用) に入れる演出も可能である。ホトソンは「十二夜」がホワイトホール宮殿の大広間の中央に作られた舞台で初演されたと推定するわけだが，そこには内舞台も奈落もない。ホトソンの説による

と，エリザベス女王の席はホールの南側にあり，女王の右側，つまり東側にオリビア邸，左側，すなわち西側にオーシーノ公爵邸が向い合って小さく飾られ，その中央に低い茂みの置き道具を出すだけで，劇全体は常に家の外で演じられ，屋内シーン (interior scenes) を必要としないという。したがってマルボーリオは，舞台に飾られた小さなオリビア邸の中へ，まるで小道具 (stage property) をしまいこむように，閉じこめられたのだと想像し，

They have here **propertied** me; keep me in darkness. (IV. 2. ll. 92–93)

というマルボーリオのセリフを引用して説明している。

いづれにしても，この場面におけるマルボーリオは声だけの出演だから，むしろこれは声色を使ったり，歌をうたったりするフェステの見せ場であるといえよう。なお George Becks の Promptbook には，マルボーリオは両手を鎖でしばられ，うめき声をあげ，ムギワラのついた彼の頭が窓からのぞく演出が記録されている。またアービングは地下牢のムギワラの上に，疲れ果てて気落ちした状態で，長々と寝そべっているマルボーリオを見せた。

5 幕では，マルボーリオは全く忘れられた存在になっている。人違いによる恋のもつれが全てめでたく解決するまでは，暗い牢に入れられて，放置されたままである。オリビアの命令で牢から連れ出されたマルボーリオは，Dyce や Becks が記録しているように，頭髪にムギワラ (straws) をつけて出るのが伝統になっている。1848 年 1 月に Samuel Phelps が Sadler's Wells で演じたマルボーリオは評判がよかったが，彼はこのラスト・シーンまでは，一貫して他人なんか眼中にないといった風に，両眼を半ば閉じたままで演じたが，トリックにかかったことを知るやいなや，両眼をかっと見開いたという。Tree のマルボーリオは首にかけている執事の鎖を引きちぎる所作を入れ，Sothern はにせのラブ・レター をこまかく引きさいて，退場するときに舞台に投げ捨てた。

マルボーリオの最後のセリフは，

I'll be revenged on the whole pack of you.

である。シェイクスピア劇の登場人物たちは，劇中におけるさまざまな体験を通して何かを学び，ラスト・シーンでは，それぞれに自己発展をとげ，進歩のあとがみられる。ところがマルボーリオの場合には，彼の強い我慾，独断，うぬぼれが風刺と嘲笑の対象になり，にせのラブ・レターでからかわれ，狂人扱いにされて暗い牢に閉じ込められたが，この最後のセリフには依然として自己反省の態度がみられず，憎しみにもえ，頑固に全員への復讐を誓って飛び出していく。John Masefield は，今では古典的になっている名著 *Shakespeare* の中の *Twelfth Night* に関する項で，

> The only cure for the sickly in the mind is reality. Something real has to be felt or experienced.

と述べている。マルボーリオは舞台上でさんざんひどい目に会ったし，マルボーリオの身の上に焦点を合わせれば，これはマルボーリオの悲劇ともいえようが，当人はにがい経験を通して少しもさとりをひらいていないのである。自分でさとらないかぎり，我慾，独善，うぬぼれといったような人間の欠点は，他人にはどうしようもないということを，シェイクスピアはマルボーリオのこの最後の描き方を通して私たちに語りかけているかのようである。

マルボーリオは他人と協調できない独善的な人物として描かれているので，シェイクスピア喜劇中，もっとも幸福感に満ちた愉快な喜劇「十二夜」の大団円の仲間入りができなかったのである。

> We all know that type of man and have a sort of pitying respect for him because he will never learn. But we should not allow his figure to dominate this play any more than we should allow his kind to dominate our daily life.

この Quiller-couch の言葉が，劇中のマルボーリオの位置を非常によく伝えているように思われる。

主要参考書目

* Brown, John Russell: *Shakespeare and His Comedies*, Methuen, 1964.

シェイクスピア喜劇における Love のテーマを一貫して追求した研究書で，「十二夜」に関しても章をもうけている (pp. 160–182). Problem Plays や Last Comedies も扱われている。シェイクスピア劇の演出上，テーマの考え方の問題などで得るところの多い書である。

* Chambers, H.A.: *A Shakespeare Song Book*, Blandford Press, London, 1957.

O Mistress Mine; When that I was and a Little Tiny Boy の楽譜がのっている。

* Crosse, Gordon: *Shakespeare Playgoing* 1890–1952, A. R. Mowbray, London, 1953.

主として著者の見たシェイクスピア劇上演記録で，写真も多数挿入している。

* Deighton, K.: *Twelfth Night*, Macmillan, London, 1950 (First Edition 1889).

Introduction で 'If the play is without an orthodox hero, Malvolio is certainly its protagonist.' と述べている。注釈は入門向きで，難解な個所の paraphrase に主眼をおいている。Introduction 中の pp. xvii–xviii を参考にした。

* Dent, J.C.: *Twelfth Night* (The New Clarendon Shakespeare), Oxford University Press, 1938.

Introduction の "The Play on the Shakaspearian Stage" の項と，Notes 及び Select Literary Criticism (W. Hazlitt, J. Masefield, D. Wilson, E. Russell, Mrs. Jameson, C. Lamb, A. C. Bradley, R. Noble, C. Byrne, J. Bailey) を参考にした。

* Furness, Horace Howard: *Twelfth Night* (A New Variorum Edition), J. B. Lippincott Company, Philadelphia & London, 1901.

Appendix の Criticisms の項の中の Malvolio (pp. 396–402), 及び Costume, etc. の項を参考にした。

* Gielgud, John: *Stage Directions*, A Random House Book, 1963.

シェイクスピア劇俳優の第一人者 Sir John Gielgud が Shakespeare 劇の演出，演技について主として語っている興味深い本。シェイクスピア劇ばかりでなく，Sheridan の *The School for Scandal*, Wilde の *The Importance of Being Earnest* をはじめ，Chekhov の劇など，彼が今までに上演に参加した作に関する項もある。本論では，とくに pp. 43–44 を参考にした。

* Harrison, G. B.: *Twelfth Night*, The Penguin Books, 1937.

text は 1623 年の the First Folio 版に忠実に従って，spelling を modernize した定評のある edition. Harrison は第 1 フォリオ版のテクストについて，'The

text is well printed, with few misprints or unintelligible readings.' といっている。

* Hazlitt, William: *Characters of Shakespeare's Plays*, The World's Classics, 1916 (Original edition, 1817).

本論では pp. 211～218 を参考にした。

* Hotson, Leslie: *The First Night of Twelfth Night*, Rupert Hart-Davis, London, 1954.

Twelfth Night の代表的な研究書。この劇がイタリアの Don Virginio Orsino, Duke of Bracciano をもてなすために，Elizabeth 女王の要請で書かれ，1601 年 1 月 6 日の Twelfth Night に Whitehall 宮殿の大広間で，arena-fashion で初演されたこと，Malvolio のモデルが女王の controller であった Knollys であり，この topical satire が大いにうけたことなどを，豊富な documents を駆使して例証している，まるで探偵小説の謎ときのような力作。この論ではとくに第 III 章の Shakespeare's Arena Stage と，第 IV 章の Malvolio を参考にした。

* Hotson, Leslie: *Shakespeare's Wooden O*, Rupert Hart-Davis, London, 1959.

前著 *The First Night of Twelfth Night* で提示したシェイクスピア劇の円形劇場形式上演説を，さらにくわしく多くの資料を駆使して説いた研究書。J. B. Priestley もいうように，シェイクスピア劇ばかりでなくドラマの上演に関心のある人は，この説をとるとらないは別としても，一度は読んでみるべき書である。

* Kines, Tom: *Songs from Shakespeare's Plays and Popular Songs of Shakeopeare's Time*, Oak Publications, New York, 1964.

O Mistress Mine; Peg O'Ramsey; Three Merry Men; Hey Robin, Jolly Robin; There dwelt a Man in Babylon; Farewell dear love; When that I was a little Tiny boy の楽譜が出ていて，上演の時に利用できる。

* Lamb, Charles: *On Some of the old Actors*, 1882.

原本は手もとになく，Dent のテクストの Appendix にのっているものを利用した。Lamb は Malvolio に関しては次のように述べている。'Malvolio is not essentially ludicrous. He becomes comic but by accident. He is cold, austere, repelling; but dignified, consistent, and, for what appears, rather of an over-stretched morality.'

* Luce, Morton: *Twelfth Night* (The Arden Shakespeare), Methuen, London, 1906.

テクストが脚注形式になっていて便利である。編者は Introcudtion の中で，'This is the Comedy of Comedies, at least so far as Shakespeare is concerned.' と述べている。

* Masefield, John: *William Shakespeare*, 1911.

Sir John Gielgud などの上演関係者も推賞する今では古典的になった，すぐれたシェイクスピア入門書。いたる所に鋭い洞察とひらめきのある作品批評がみられ，作品や性格の解釈の鍵となる。Malvolio に関しては次のように述べている。

'Malvolio is in an unreal mood of self-importance. Long posing at the head of ceremony has given him the faith that ceremony, of which he is the head, is the whole of life. This faith deludes him into a life of day-dream.

* Meeres, N. V.: *Twelfth Night* (The Scholar's Library), Macmillan, London, 1952 (First Edition 1935).

学生向きで，語句の注釈を主とした edition. 巻末に Questions と Essay Subjects がついている。Introduction 中の The Principal Characters の項を参考にした。'It is because he is "sick of self-love" that we are glad to see him gulled; and after he has been abashed and humiliated by his imprisonment, we feel rather sorry for him.' この Meeres の意見は Malvolio を central figure とみて，彼の身の上に sympathy を感じる立場である。

* Quiller-Couch, Arthur and Wilson, John Dover: *Twelfth Night* (The New Shakespeare), Cambridge University Press, 1930.

本文には比較的くわしい ト書がつけてある。Introduction と巻末の Notes, 及び Harold Child による簡潔な Stage History が参考にな。

* Rolfe, William J.: *Twelfth Night*, American Book Company, 1879.

Shakespeare の立像画をはじめ，各所に挿入されたこの劇の背景知識となるペン画のさし絵が特色である。注釈には Schmidt の引用が目立つ。

* *Royal Shakespeare Company* 1960–63, Max Reinhardt, London, 1964.

1960 年に Aldwych Theatre で上演された Dorothy Tutin の Viola, Eric Porter の Malvolio による 6 葉の舞台写真が出ている。

* *Shakespeare at the Old Vic*, Adam and Charles Black, London, 1954.

The Old Vic Five-year First Folio Plan のうちの Season 1953–54 に上演された *Twelfth Night* の記録と舞台写真が豊富に出ている。Viola を Claire Bloom, Malvolio を Michael Hordern が演じた。

* *Shakespeare at the Old Vic*, Hamish Hamilton, London, 1958.

上記の第 1 フォーリオ版 5 か年上演計画の最後の年である 1957–8 年のシーズンには，*Hamlet* と *Twelfth Night* が再演された。この時には Viola を Barbara Jefford が演じ，Malvolio には Richard Wordsworth が扮した。

* *Shakespeare Memorial Theatre* 1954–56, Max Reinhardt, 1956.

1955年のシーズンに，John Gielgudの演出，Vivien LeighのViola, Laurence OlivierのMalvolioという実に豪華な顔ぶれで上演された *Twelfth Night* の舞台写真7枚と，Ivor BrownのA critical analysisが収録されている。

* *Shakespeare Memorial Theatre* 1957–1959, Max Reinhardt, London, 1959.

1958年にDorothy TutinのViola, Mark DignanのMalvolioで上演された時の舞台写真8枚と，Ivor BrownによるIntroductionが収録してある。

* Sprague, Arthur Colby: *Shakespeare and the Actors—The Stage Bisuness in His Plays* (1660–1905), Russell & Russell, New York, 1963 (First Edition 1944).

シェイクスピア劇の上演法に関する資料をたんねんに集めて，作品別に分類してあるので，演出家，俳優にとって非常に便利な本である。1660年以後の演出上のtraditionを知ることができる一冊本の貴重なコレクションだが，アメリカの図書館にある資料が主で，本国イギリスの資料が十分に利用されていないのが惜しまれる。さし絵，写真も豊富で，上演に関心をもつ人の必備の書といえよう。

* Trewin, J.C.: *Shakespeare on the English Stage* 1900–1964, Barrie and Rockliff, London, 1964.

表題の示す通り今世紀にWest End, The Old Vic, Stratford-upon-Avonなどで上演されたシェイクスピア劇を概観した労作で，上演記録として貴重な資料となっている。Appendixの上演年表と各所に押入された豊富な舞台写真が参考になる。Spragueの *Shakespeare and the Actors* とともに，上演に関心をもつ人の必備の書であろう。

* Verity, A. W.: *Twelfth Night* (Pitt Press Shakespeare), Cambridge University Press, 1952 (First Edition 1894).

入門者向きで，注釈と解説がていねいである。Introduction中のIV. The Characters of the Playの項を参考にした。

"Self-love" implies extreme self-conceit and vanity. With Malvolio "self-love" is what Pope calls "the ruling passion." とVerityは説明している。

* Webster, Margaret: *Shakespeare Without Tears*, a Premier Book (Fawcett World Library), New York, 1957.

p. 154でMalvolioにふれている個所を参照した。

* Williamson, Audrey: *Old Vic Drama* 2 (1947–57), Salisbury Square, London, 1957.

1937年のOld Vic, 1948年のNew Theatre, 1954年のOld Vic, 1931年のSadler's Wells, 1955年のStratford-on-Avonの各上演にふれている。

* Wilson, John Dover: *Twelfth Night* (The Cambridge Pocket Shakespeare), Cambridge University Press, 1958.

The New Shakespeare 版の text に glossary をつけたハンディな edition. 本論の引用，行数などはすべてこのテクストによった。

* Wilson, John Dover: *Shakespeare's Happy Comedies*, Faber and Faber, London, 1962.

シェイクスピア批評史では本格的な喜劇論があまりみられず，G. Meredith の *Essay on Comedy* (1903) や H. Bergson の *Laughter* でもシェイクスピア喜劇が無視されているのをいかんとして，長年の待望に答えて著者の喜劇論をまとめたもの。Ben Jonson や Moliere など neo-classicists の comedy が intellect に訴える 'comedy of ideas' であるのに対して，Shakespeare の喜劇を 'Comedy of the emotions' とみる。そして *Errors* から *Twelfth Night* までの happy comedies では，love と friendship が leading theme になっているとみている。